

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

イスパニア語の「que+接続法」単文について

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2006-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福鳶, 教隆, Fukushima, Noritaka メールアドレス: 所属: |
| URL | https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/659 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



イスパニア語の「que + 接続法」 単文について

福 畠 教 隆

1. はじめに

接続法 (modo subjuntivo) という名称は、「他の要素に接続する」動詞形態であるという点に由来するが、接続法は従属節ばかりでなく、さまざまな単文でも用いられる。接続詞queに導かれる用法もその1つである。以下では、この構文を「que + 接続法」単文と呼ぶ。本稿では、接続法と「従属」との関係を考える契機にするため、この構文の働きを調べてみたい。

2. 総論と問題提起

文法書、辞書、研究書によれば、「que + 接続法」単文には、次のような用法があるとされている。

(1) 願 望

- a. ¡Que te mejores! (Sastre, 1997: 45)
- b. ¡Que te diviertas! (Díaz *et al.*, 2002: 19)
- c. ¡Que llueva, que llueva...! (Sastre, 1997: 45)
- d. ¡Que te maten villanos, rey! (Garrido, 1999: 3909)
- e. Y que no tenga que repetírtelo. (And I don't want to have to tell you again.) (Galimberti *et al.*, 1994: 630)

* 本稿は、2005年度日本スペイン語学セミナー（2005年8月30日、於伊豆市）及び対照研究セミナー第31回例会（2006年2月5日、於神戸市）での口頭発表をもとにしています。貴重なご意見をくださった諸賢に御礼申し上げます。

f. Que no le haya pasado nada. (Hernández Mercedes, 2006: 31)

g. Que hubiera avisado. (Gutiérrez Cuadrado *et al.*, 1996: 1308)

(1a~c) に代表されるような幸運を祈る表現が多いが、(1d) のように呪いを表すことも可能である。(1e) のように話者を主語にすることもできる。これは聞き手への命令として、次の(2)に含めることもできる。(1f~g) のように、現在形以外の時制の使用も可能である。(1g) は「~してくれれば良かったのに」という、過去への願望を表している。

(2) 命令

a. ¡Que te calles! (Sastre, 1997: 54)

b. Que no cojas frío. (Alarcos, 1995: 43)

(3) 間接命令

a. Que me llame Juan cuando llegue. (Garrido, 1999: 3913)

b. ¡Que se vayan! (Alarcos, 1995: 43)

できごとの実現が聞き手の意志に委ねられていると解釈できる場合は、「que+接続法」単文は命令の表現になる。(2) は聞き手が主語の文である。(2b) は「寒いから風邪を引かないでね」という願望にも、「厚着をして風邪を引かない努力をせよ」という命令にもなり得る。(3) は3人称が主語だが、できごとの実現を聞き手に命じる文、即ち間接命令の表現となっている。

(4) 感嘆

a. ¡Que tenga yo que aguantar este insulto...! (Moliner, 1998: II-826)

b. ¡Que me pase esto a mí, a mis años! (RAE, 2005: 545)

c. ¡Que nadie me ayudara en aquel trance! (Martinell, 1985: 27)

d. ¡Que no le hubieran visto a tiempo! (Fernández Álvarez, 1984: 106)

この構文は、実際に起きていることに、不平、嘆きといった主観的評価を加えて表現することもできる。(4c, d) のように、現在形以外の時制も可能

である。

以上のような説明を前に、いくつかの疑問が浮かぶ。第1に、「que+接続法」単文の諸用法は単一の原理に収束するのだろうか。(1)「願望」、(2)「命令」、(3)「間接命令」は意味的に明らかな共通性が認められるが、(4)「感嘆」用法は他とは異質のように見える。これが同じ形式で表される理由は何だろうか。

第2に、この構文の文意に近似した内容を、他の表現形式でも表すことができる。即ち、(1)の「願望」用法と(5a)のように *ojalá* を用いた文（以下「*ojalá* 文」と言う）、(2)の「命令」用法と(5b)のような一般の命令文、(3)の「間接命令」用法と(5c)のような複文、(4)の「感嘆」用法と(5d)のような複文との間の意味的類似性が認められる。これらは同義なのだろうか。そうでなければ、どのような点で異なるのだろうか。

(5) a. ¡Ojalá (que) llueva! (ojalá 文) ((1c)と比較せよ)

b. Cállate. (命令文) ((2b)と比較せよ)

c. ¡Diles que se vayan! (間接命令の複文) ((3b)と比較せよ)

d. ¡Qué pena (es) que me pase esto a mí, a mis años! (感嘆の複文) ((4b)と比較せよ)

以下では、これらの疑問に対する答えを探っていこう。

3. 調査

「que+接続法」単文の実例を収集するために用いた資料は上田(1984~1997)である。これは現代のイスパニア(スペイン)の30の演劇作品からなる、総語数488,261の資料である。Real Academia EspañolaのCREAやBrigham Young大学のMark Davies教授が公開しているコーパスは、個々の事例の統語的・意味的特徴を仔細に検討するには、膨大でありすぎる(調査時点で、queの用例は前者には4,928,129件、後者には131,760件ある)。一個人で処理できるサイズの、しかも良質な資料として、あえて

上田(1984~1997)を採択し, CREA や M.Davies コーパスは補助的に使用することにした。

上田(1984~1997)からは18,329件の *que* の用例が得られるが, 名詞節や副詞節を導く接続詞, 比較の接続詞, 関係代名詞などとしての使用がその大半を占める。*que* が単独で接続法と共起する用例は299件に絞られる。内訳は次のとおりである。¹⁾このうち, 本稿の対象となるのは, (6a)~(6d)の229件である。

(6)

| 分類 | 件数 | 現在形 | 現在完了形 | ra形 | se形 | 例文 |
|---------|-----|-----|-------|-----|-----|------|
| a. 願望 | 50 | 50 | 0 | 0 | 0 | (7) |
| b. 命令 | 70 | 70 | 0 | 0 | 0 | (8) |
| c. 間接命令 | 108 | 108 | 0 | 0 | 0 | (9) |
| d. 感嘆 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | (10) |
| e. 主節省略 | 69 | 50 | 2 | 8 | 3 | (11) |
| f. その他 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | (12) |
| 計 | 299 | 285 | 2 | 9 | 3 | |

(7) a. —Adiós, muchachos. *Que seáis* muy felices.

—Gracias. (J. Salom, *Culpables*, 272)

b. —Defended vuestros derechos, tan mezquinos, tan a ras de tierra como se parezca: cara a cara o solapadamente. Yo defenderé el más sagrado de todos: mi derecho a salvarme.

—*Que no sea* a ti a quien Dios castigue por esto, sino a mí.

(J. Calvo Sotelo, *La muralla*, 110)

(8) a. —Diga... ¡*Que diga!*... ¿Cómo? (J. J. Alonso Millán, *El crimen al alcance de las clase media*, 429)

b. —Vete.

—Pero si...

1) 以下, 引用は, 上田(1987) *Análisis lingüístico de obras teatrales españolas* 第3巻から行い, 演劇作品の作者名, 題名, 掲載ページ数を記す。

- Que te *vayas*. (A. Paso, *La corbata*, 653)
- (9) a. —Señora, ahí está el señor cura de ayer.
 —No... Es maravilloso... Que *espere* un momento. (J. Calvo Sotelo, *La muralla*, 86)
- b. —¡Por Dios, don Carlos! ¡Por la Virgen, admítale otra vez!
 ¡Aunque sea en el mostrador!
 —Que *venga* él a pedirme perdón.
 —Eso no puedo conseguirlo. (A. Paso, *La corbata*, 661)
- (10) —¡Reconoce que es un terrible esfuerzo de imaginación!
 —¡Que un marino se *resista* a la imaginación! ¡Vosotros, que habéis vuelto del mar, siempre, con una nueva mentira! Las siernas, las nereidas, los tritones, y todas las islas inventadas...
 (J. López Rubio, *Nunca es tarde*, 329)
- (11) a. —Entonces, ¿qué me aconsejas?
 —Que *devuelvas* lo que no te pertenece. (V. Soriano de Andía, *Ayer... será mañana*, 786)
- b. —¿Sabes lo que pienso? Que tal vez se *hayan rebelado* todos a un tiempo. Una rebeldía colectiva y furiosa. (R. Hernández, *Tal vez un prodigio*, 199)
- (12) —¿Qué quiere dar a entender su sonrisa? ¿Que yo *debiera* estar en el frente combatiendo contra ustedes y que he preferido vivir oscuramente como un ciudadano cualquiera? (L. Delgado Benavente, *Media hora antes*, 126)

(6e) は、主節省略により従属節が単独で用いられるもので、純然たる単文ではない。たとえば (11a) の答えの文には *Te aconsejo*, (11b) には *Lo que pienso es* という主節が復元可能である。更に後者の場合は、接続法は主節ではなく、従属節内の *tal vez* に導かれている。また事例(12)の接

続法はモーダル動詞 *deber* の婉曲用法によるものであることから、(6f) 「その他」に分類した。これらの用例は、単独の *que* が接続法を導いているわけではないので、本稿の対象から除外される。²⁾

上記の理由から「*que*+接続法」単文と呼べるのは(6a~d)に限られる。そのほとんどは「願望」、「命令」、「間接命令」の用例であり、「感嘆」の事例は1件に過ぎない。また時制については、現在形以外の事例が全く見あたらない。少なくとも、この資料に関する限り、〈「*que*+接続法」単文は、主に「願望」、「命令」、「間接命令」を表し、一般には現在形を用いる。〉と
言ってよさそうである。³⁾

2) 瓜谷・他(1989)は、現代スペインの演劇、小説、時事文などの資料から、*que*で始まり、接続法が用いられる単文を121件あげている(p.192~199, 206)。ただし、その中には「*que*+接続法」単文だけでなく、次例のような(6e)「主節省略」の用例も含まれている。

(i) —Nosotros veríamos con muy buenos ojos que se casara usted con Marcelino.
—¿Que yo me *casara* con éste? (M. Mihura, *Maribel y la extraña familia*)

3) より大きな資料を用いれば、「感嘆」用法の事例や現在形以外の事例も得られることは言うまでもない。Real Academia EspañolaのCREAには、次のような事例があった。

(ii) —¡Faraón ingrato! —exclamó entre jadeos—. ¡Que *tenga* que adorarte en soledad y gozarme en ella porque está prohibido que me goce de ti! (Terenci Moix, *El arpista ciego. Una fantasía del reinado de Tutankamón*, Planeta, Barcelona, 2002, p.270).

(iii) A: —¿Qué cosas tenían que mejorar para los niños?

B: —Que hacer muchos parques. Que *pongán* vías de bicicletas.

A: —¿Bicicletas y parques? ¿Y tú?

C: —Que no *tuviéramos* tantos deberes.

A: —Que no *tuviérais* tantos deberes. ¿Y para los niños de fuera de aquí?

D: —Que se *acabaran* las guerras. Que *hubiera* casa para todos.

A: —Que *hubiera* casa para todos. ¿Que te parece, Quique?

E: —Se le ha olvidado una cosa.

A: —¿Cuál?

E: —Que *hubiera* paz. (Telemadrid, 1996年11月20日放送。テレビ討論。A: 司会者, B~E: 参加者(児童)。読みやすくするため原資料に手を加えて表記)

(ii)は、ある男性が古代エジプトの王妃の棺のかたわらで、「あわれな王よ。私が入目を忍んであなたをたたえ、王妃をめでることになろうとは！」と詠嘆する場面の描写である。

また(iii)では、児童と司会者が願望を表す「*que*+接続法」単文を繰り返し使用し、そこに接続法過去形も用いている。「自転車専用道路を作ってほしい」といった実現度の高い願望には現在形を充て、「宿題を減らしてほしい」、「誰もが家を持てるような社会を」、「戦争のない平和な世界を」のような、実現困難な願望には過去形を充てて、ニュアンスを区別している様子が明らかである。

4. 「願望」用法

資料から得られた「願望」用法の用例には、(7b)のように聞き手の不幸を願うものもあるが、大半は(7a)のような聞き手の幸運を祈る表現であった。これは第2節に記した従来の記述と合致する。Que aproveche. (おいしく召し上がれ), Que cace usted mucho. (獲物が多いといいですね), Que pasen buena noche. (楽しい夜をお過ごしください)のように、当事者の意志だけでは達成しがたい、制御不能なことを願う表現である。

この用法は、「誰かに別れのあいさつをし、幸運を祈る場合 (cuando queremos despedirnos de alguien y desearle algo agradable) に多用する」(Díaz *et al.*, 2002: 20)や、「通例は幸運を願う際に用いる (normalmente expresa “buenos deseos”）」(Hernández Mercedes, 2006: 31)のように述べられているが、(5a)のようなojalá文との違いについては、スペイン語を母語とする研究者はあまり関心を示していない。中には、Fernández Álvarez (1984: 109)のように、「que+接続法」単文をojaláが省略された形式とみなす立場も見られる。

しかし実際には、両者に使用の上での区分が存在する。たとえば見舞い客が病人に言う表現として、(13a)は適切であるが、(13b)はあまり適切とは言えない。ojalá文を使うと、快復の見込みがあまりなさそうなニュアンスが生じるため、病人への励ましにはならない⁴⁾。この事実は、「ojaláは強い

4) (13a, b)の使用の可否につき、筆者が複数の母語話者に尋ねたところ、次の(iv)に代表されるように、「(13a)を適切、(13b)を不適切」とする回答が大勢を占めた。ただし中には(v)のように、むしろojalá文の使用が好ましいとする回答も存在した。この回答者にとっては、「que+接続法」単文は定型表現化していて、内容が空疎と感じられるのかも知れない。

(iv) No se diría *Ojalá te mejores pronto*. Si digo eso parece que no creo mucho en sus posibilidades de mejora. Lo normal es decir *Que te mejores pronto*., y eso indica como que creo que se va a mejorar seguro. (スペイン人女性。電子メールによる回答)

(v) Si se utiliza la oración con *ojalá*, el oyente puede percibir que no está muy seguro de su mejora, pero eso es algo subjetivo que tiene que ver con la particular interpretación que haga el oyente en ese momento de su vida. Utilizando *ojalá* el oyente siente la empatía del hablante. Si sólo decimos *Que te mejores*., excluimos esta connotación. *Que te mejores*. implica menos afectividad y mayor distanciamiento emocional. Cuando utilizamos *Ojalá te mejores*., mostramos empatía, nos identificamos emocionalmente con la situación o expresamos una ↗

願い (expresa un fuerte deseo) を表す」(Gutiérrez Cuadrado *et al.*, 1996: 1106) といった見地では説明が困難である。スペイン語を母語としない学習者はこの2文を同義と考え、不適切な使用をしてしまう恐れがある。

(13) a. Que te mejores pronto.

b. Ojalá te mejores pronto.

高橋 (1996) はこの問題を正面からとらえた画期的な論考である。同論文によれば、「que+接続法」単文は無標な願望文であるのに対し、ojalá 文は願望の実現の不確実性が示された有標の文だという。

本稿の資料中の用例を見ると、確かに聞き手の幸運を祈る文脈では ojalá 文ではなく、「que+接続法」単文が使用されている。健康快復を願う例としては(14a)があげられる。一方、ojalá 文は22件得られるが、このような文脈に用いられているのは(14b)のみであった。この事例では、第1話者(父親)は第2話者(娘)の結婚に反対している。それを承知で結婚しようとする娘に対して、前途を危ぶみつつ祝福するという状況であるから、ojalá 文の使用は高橋 (1996) の提案する区分で説明できる。

(14) a. —¿Y qué sueldo tiene usted? Reúne seis mil. Nueve hijos. Sí, señor. ¿La mujer mala? ¡Vaya por Dios! Dándoles carrera a todos. ¡Ah, usted también cree que Dios aprieta, pero no ahoga! Bueno..., pues que se *mejore* el chico. Gracias. No, no reclamamos. ¿Por qué me iban a tener que hacer caso ahora? Vamos, Mercedes. Vamos. ¡Que se *ponga* buena su señora! (A. Paso, *La corbata*, 660)

b. —Hija mía, ojalá que todo te *vaya* bien. Créeme que no hay nada en el mundo que yo desee más que eso.

—Permíteme que lo dude, papá. (J. Calvo Sotelo, *La muralla*, 101)

↘intención sincera sobre alguna emoción. ¡Ojalá que te sirva! (スペイン人女性。電子メールによる回答)

とは言え「que+接続法」単文が無標で、ojalá 文が有標であるなら、「不確実性」という有標の意味を除去すれば、後者は前者によって代替可能であるはずだが、それが難しい場合もある。

(15) a. —¿Te molesta?

—¿Qué?

—Que te haya esperado.

—Oh, no... Ojalá *puedas* hacerlo siempre. (R. Hernández, *Tal vez un prodigio*, 203)

b. Ojalá *puedas* venir a la fiesta. (Kleiman, 1974: 36)

たとえば本稿の資料から得られた(15a)は、「私があなただを待つのは迷惑ですか」と問う女性に対して、男性が「とんでもない。いつも待っていてくれると嬉しいんだが」と答えるという対話である。この ojalá を que に置き換え、Que *puedas* hacerlo siempre. とすると、きわめて座りが悪い文になる。同様に、Kleiman (1974)によれば、(15b)の ojalá を que に改めると、不自然な文になるという。

管見では、「que+接続法」単文と ojalá 文の違いは、不確実性の表示の有無のみならず、願望の実現に向けての働きかけの差異にも存するのではないかと考える。即ち、ojalá 文は単に「願う」行為を遂行する文であるのに対して、「que+接続法」単文は、「願う」だけでなく、その願いを「実現せよ」と、誰かに働きかける文ではないだろうか。

もし(1c) ¡Que llueva, que llueva...! と(5a) ¡Ojalá (que) llueva! の違いが単に不確実性の有無によるものなら、(1c)は「不確実性無標」、(5a)は「不確実性あり」、そして ¡Ojalá lloviera! が「不確実性大いにあり」と、3つの文が単一の尺度で区別されることになる。しかし(1c)と(5a)の違いは程度の差というよりも、「雨よ、降れ」という、擬似的な命令表現と「雨が降りますように」と願う表現との差に求めるべきであると思われる。

(13b)は「早く君が元気になることを望む」という願望の表明、あるいは

超自然的な存在にむかって祈願する文である。他方、(13a)は「早く元気になりなさい」と、健康快復があたかも制御可能な事柄であるかのように、その実行を聞き手に求める文である。誰かを励ましたり、祝福したりする場合、当該者を傍らにおいて祈願の行為を行うよりも、当該者自身にむかって、行動を起こす心構えを持つよう働きかけるほうが自然である。(13a~b)の使用の差異は、ここにも起因すると見ることもできよう。また(14b)では、父親が娘を前にしながら、「お前が幸せになればいいが」といった *ojalá* 文による非直接的な発言をするので、娘はその真意を疑っていると解釈できる。

(15a, b)の *ojalá* 文を「que+接続法」単文で代替すると不自然になるのは、*poder*という動詞の意味特性によるものと考えられる。即ち、「可能であれ」という命令表現は成立しづらい。このことから、「que + 接続法」単文の「願望」用法は、実現を命じる働きかけを伴っていると見たほうが良いことがうかがえる。⁵⁾

以上の考察によって、第1に「que+接続法」単文は *ojalá* 文とは同義ではないこと、第2に「願望」用法は、行為をうながす働きかけ、即ち「命令」とのつながりがあると見るべきではないかということが確認された。

5. 「命令」用法

続いて「命令」用法の分析に移ろう。一般に、(2) *¡Que te calles!* のよ

5) *ser feliz, mejorarse, pasarlo bien* など、願望用法の「que+接続法」単文に頻繁に用いられる動詞は、制御困難な事柄を表すが、*poder*とは異なり、次のように命令文を作ることが不可能ではない。「命令文に改められるか否か」ということが「que+接続法」単文の願望用法の成立の1つの指標になるかもしれない。

(vi) (...) donde no faltó la confesión de que hace unos años le ofrecieron ser senador, a lo que su madre sólo le aconsejó: “*Sé feliz.*” Por eso —amplió su sonrisa— decidió no aceptar aquel cargo. (*Noticia Argentina*, Buenos Aires, 288, M. Davies コーパス)

(vii) *Mejórense*, exíjanse mayores niveles de calidad, pónganse listones más altos para los autores. (*ABC*, Madrid, M. Davies コーパス。ただし人間の健康ではなく、新聞紙面の充実に関する話題)

(viii) *¡Al ajo!* Entiéndase que después de este altercado, a la colección le llamen *Suspiros*, no es para menos. *Mejorate*, majete. (*El Mundo*, Madrid, 1999年2月19日。CREA)

(ix) Recuerda que para ampliar las imágenes debes dar clic sobre ellas, y *diviértete*. (*Revista Guanaquín*, San Salvador, 2004年4月4日。CREA)

うな「que+接続法」単文の「命令」用法は、(5) *Cállate.* のような一般の命令文とは、表す意味が異なるとされている。たとえば、Sastre (1997: 549) は「遂行されなかった命令の反復 (*insistir en la orden en los casos en los que se ha hecho caso omiso de la primera*) に用いる」と説明している。確かに本稿の資料でも、(8a~b)のように、命令した行為が直ちに実行されなかった場合に、時にいらだちをこめて、命令を繰り返す際の用例が多く見られる。⁶⁾

だが、初めて発する命令であっても、「que + 接続法」単文の形で表されることもある。次の(16a~b)がその例だが、単なる命令文ではなく、そこに別の意味が付加されている。(16a)は「他人のことを思いやってくれないか」と優しく諭す場面である。また(16b)では家政婦が主人に電話をかけ、「すぐお帰りください」と、主人の妻の希望を伝えるに当たって、*Que venga en seguida.* という形式を使っている。どちらも、聞き手にとっては初めて受ける命令であり、かつ「できれば~してほしい」という控えめな、あるいは伝言による依頼を表している。

(16) a. —Basta con que sacudas tu egoísmo de niña mimada, con que pienses que a tu lado hay seres que necesitan de ti. Que te acuerdes de los demás. (J. A. de Laiglesia, *La rueda*, 407)

b. —Rafa, llame usted al señor a la oficina. Ya sabe el número.

—¿Que llame yo al señor? (...) ¿Y qué le digo?

—Que venga a casa en seguida. (...)

—(Al teléfono.) ¿Es el señor? Soy Rafa. Perdone el señor:

Rafaela. Que venga en seguida. ¡No, no, señor, no pasa nada!

6) 和佐 (2005: 166) のあげる次の例とその和訳を参照。

(x) —¡Abre! 「開けろ！」

—¡No! 「いやよ！」

—¡Que abras! 「開けると言っているんだ」

—¡Que no! 「いやだって言ってるでしょう！」

(M. Mihura, *Tres sombreros de copa*)

(C. de la Torre, *La caña de pescar*, 871)

このように、同一の構文が、主に音声的要素によって区別されつつ、時には高圧的な命令を、また時には婉曲的な依頼を表すわけである。いずれの場合も、単純な命令ではなく、語調の「強化・弱化」という、正または負の調整が加わっている点が、通例の命令文と異なっている。この特徴は「que+接続法」単文の「命令」用法が「願望」用法と連続体を成していることに起因すると思われる。

第2節で述べたように、「願望」と「命令」の区別は、できごとの実現が聞き手の意志に委ねられていると解釈できるか否かによる。Garrido (1999: 3909)は、「que+接続法」単文が「話者による制御が不可能 (*imposibilidad de control por parte del hablante*)」な事柄を表す場合を「願望」用法とみなし、制御可能な事柄を表す場合は「命令」用法とみなす。しかし両者の間に截然とした境界を設けるのは困難である⁷⁾。先にあげた例文(2b) *Que no cojas frío.* のように、願望とも命令とも解釈できる文も存在するし、前節で考察したとおり、「願望」用法にも、「聞き手への働きかけ」という命令的要素が含まれている。従って、逆に「命令」用法に願望的要素も認められると考えることもできる。即ち、この用法は、聞き手に命じつつ、実現を願う行為も行う表現であるとみなすのである。そうすれば、音声的要素次第で、「私は～の実現を願っている。だからあなたに命じるのだ」という強い命令になる場合もあれば、「私はあなたが～することを、命じるというよりは願っているのだ」という柔らかい表現になる場合もある、という説明が可能になる⁸⁾。

7) 寺崎 (1998: 219) は「que+接続法」単文の「願望」用法について、こう述べている。「間接命令文と同じ構造になり、その境界は明確には分けられない。命令の意味になるか、願望の意味になるかは文脈次第である。」

8) que が直説法を導く単文が、次の例のように強調表現として働く場合もある。この現象も問題と関連しているであろうが、本稿では立ち入らない。

(xi) —Sigue usted igual que antes; pero disfrazao.

—Igual que antes, no. Que ahora soy bachiller. (J. Mathias, *Un paleta con italento!*, 519)

以上の考察によって、第1に「que+接続法」単文は通常の命令文とは同義ではないこと、第2に「命令」用法は、「願望」とつながりがあると見るべきではないかということが確認された。

6. 「間接命令」用法

「que+接続法」単文には、3人称を主語とすることでのごとの実現を命じる用法もある。これは一般には「第三者に対する命令 (órdenes a terceros)」(Garrido, 1999: 3912) と言われ、また「たとえば *querer*, *decir* のような意志を表す主動詞が潜在している (hay un verbo principal ausente, un verbo de voluntad, como *querer*, o un verbo como *decir*, por ejemplo)」(Martinell, 1985: 24-25) のような説明がしばしばなされる。即ち、先にあげた例文(3b) ¡Que se vayan! は、「彼ら」に向けての命令であり、(5c) ¡Diles que se vayan! の *diles* が略されたものと見るわけである。

しかし、この用法が必ずしも第三者に向けられているとは言えない。たとえば次の(17a, b)の「間接命令」の文の主語は確かに3人称ではあるが、*la cena*, *tu bolso* という無生物である。命令は、これら3人称主語ではなく、聞き手に対して発せられていることは明らかである。⁹⁾

(17) a. —(Va hacia la puerta del campo.) ¡Que esté pronto la cena!
(J. M. Pemán, *Tres testigos*, 674)

b. —¡Venga tu bolso!

—¡No tengo por qué enseñarle el bolso a nadie! He dicho que no tengo dinero.

—¡Que venga tu bolso! (J. Martín Recuerda, *Las salvajes en Puente San Gil*, 555-556)

このことから、たとえ主語が人間である場合でも、命令は聞き手にも（ま

9) (17b)は、主語が2人称に限らず3人称の場合でも「遂行されなかった命令の反復」という文脈で、当該の構文が使用可能であることも示す例でもある。

たは聞き手に) 向けられているのではないかとの推測が働く。つまり, (3b) と(5c) は同義ではなく, 前者は聞き手に「彼らが立ち退くこと」の実現を迫る文であるのに対して, 後者では, 聞き手は「立ち退け」と伝えることを命じられていると見るわけである。この推測を裏付けるのは, (3a) *Que me llame Juan cuando llegue.* に関する Garrido (1999: 3913) の次のような説明である。「この文では, 3人称で言及された者だけでなく聞き手もできごとの実現について責任を負う。聞き手は命令を伝えるだけでなく遂行されることを保証しなければならない (*la responsabilidad de que la acción tenga lugar no es sólo de quien se alude en tercera persona, sino también del oyente, que debe no sólo transmitir la orden sino garantizar que se cumpla*)。」

この考えを本稿資料に適用してみよう。先に出した(9b)には *que venga* という形, また次の(18)には *dile que venga* という形が用いられている。

(18) —*Está en la cocina, ayudándome a pelar patatas.*

—*¿Ayudando a...? ¡Dile que venga inmediatamente!*

—*Sí, señor. (J. Mathias, Un paleta con ¡talento!, 530)*

(9b)では, 聞き手は「彼」に話者の意思を伝えるだけではなく, 実際に来るところまで見届けることを命じられている。それは *Eso no puedo conseguirlo.* という返答からうかがえる。この返答は「あなたの命令を伝えることができない」というのではなく, 「彼の来訪を実現できない」という意味である。一方, (18)では聞き手は「彼」に「来い」と言いさえすれば, 課せられたタスクは終了するということになる。*Sí, señor.* という返答は「あなたの言葉を伝えてきます」という意味である。実際の言語運用では, 常に厳格な使い分けがされるとは限らないであろうが, 少なくともこの例では, それぞれの文脈の中で, 上述の解釈は無理なく成立する。

さらに, 次の(19a, b)のように, 「間接命令」用法は通常のコマンド文と等位構造を形成することができる。これは, この用法における命令は聞き手に向

けて発せられていることを示唆していると考えられる。¹⁰⁾

(19) a. —¡Abrid la puerta y que *quede* abierta de una vez! (J. Martín Recuerda, *Las salvajes en Puente San Gil*, 551)

b. —¡Entrenamiento! ¡Eso es lo que hace falta!

—¡Ande y que lo *fichen*! (L. Olmo, *El cuerpo*, 599)

以上の考察によって、第1に「間接命令」用法の「que+接続法」単文は間接命令の複文とは同義ではないこと、第2に「間接命令」用法は、聞き手に向けられた「命令」とつながりがあると見るべきではないかということが確認された。

7. 「感嘆」用法

最後に、「感嘆」の用法を検討しよう。この用法は「意外性，感嘆の文脈 (extrañeza, contexto exclamativo)」(Gutiérrez Cuadrado *et al.*, 1996: 1308), 「不平，嘆き (queja o lamentación)」(RAE, 2005: 545) を表すとされている。第3節で述べたように、この用法の唯一の事例は(10)であった。空想の世界に遊ぶ会話に飽きた船員に対して、女性が「船乗りが想像力を働かせるのをいやがるなんて！ (¡Que un marino se resista a la imaginación!) 海の冒険譚はあれほど空想力豊かなのに」と言ってやりこめる場面である。この「que+接続法」単文には、「～だなんて常識に反する」, 「奇異だ」といった驚き，非難や，「～だなどと，あなたは言うのか」, 「私には信じられない」のような不信，疑惑が表現されている。即ち，「感嘆」から「疑惑」に至る広い主観的評価が加わった文である。

翻って，第2節であげた「感嘆」の例(4a～d)を見ると，「感嘆」ばかりでなく，「こんな事態があり得るとは想定外であって，信じられない」という「疑惑」の意味も表現されていることが分かる。

10) この現象は，次の(xii)のような不定詞と接続法の等位構造を想起させる。

(xii) No puedo callar más. Necesito decirlo y que usted me oiga. (A. Casona, *La barca sin pescador*, 48)

一般に、名詞節に接続法が用いられる場合は、意味的観点からは次の3つに大別され、どの用法も多用される。

(20) a. 願望 : {Deseo / Le ordeno / Le aconsejo} que venga.

b. 疑惑 : {No creo / Dudo} que venga.

c. 感情 : {Me alegro de / Me extraña} que venga.

一方、「que+接続法」単文の使用頻度は、圧倒的に「願望」用法が優勢である。(6a)「願望」、(6b)「命令」、(6c)「間接命令」は、意味的には全て名詞節の(20a)「願望」用法に対応する。(6d)「感情」用法だけは、「願望」ではなく(20c)「感情」用法と(20b)「疑惑」用法に対応すると言えよう。

なお、Fernández Álvarez (1984: 106)は(4d) ¡Que no le hubieran visto a tiempo! などの例文をあげるに当たって、これを ¿Será posible que no le hubieran visto a tiempo? のような疑惑表現の主節が略された形式とみなしうることを示唆している。しかし、(4d)に疑惑の意味が含まれているにせよ、será posibleという具体的な語彙が省略されたものと見る統語的根拠はない。先述のとおり、広く「感嘆」から「疑惑」に及ぶ話者の主観的態度が表されている、とするにとどめるべきであろう。同様に、(4b) ¡Que me pase esto a mí, a mis años! の場合も、(5d) ¡Qué pena que me pase esto a mí, a mis años! の主節が欠落したものと単純に考えてはならない。

以上の考察によって、第1に「que+接続法」単文の「感嘆」用法は「感情」から「疑惑」に至る広い主観的態度を示すこと、第2に「感嘆」用法は、単純に感情または疑惑の複文と同義と見るべきではないことが確認された。

8. むすび

以上の考察をまとめ、次の諸点をもって本稿の結論とする。

(21) a. 「que+接続法」単文の働きには、「願望」系と「感情・疑惑」系の2系列がある。これは接続法を導く名詞節と同様である。

b. 使用頻度は「願望」系が圧倒的に優勢である。

- c. 「願望」系は「願望」、「命令」、「間接命令」の3つの用法に下位区分できる。「感情・疑惑」系は、「感嘆」用法として表出する。
- d. 「願望」用法は、単に「願う」だけではなく、当該者に行為をうながすよう働きかける（命令する）表現である。「願う」ことを主眼とする *ojalá* 文とは、その点で異なる。
- e. 「命令」用法は、主に音声的要素によって強調や和らげを付加した命令の表現である。無標の命令文とは、その点で異なる。
- f. 「間接命令」用法は、第三者だけでなく聞き手にも向けられた命令の表現である。主節の内容の達成のみを命じる間接命令の複文とは、その点で異なる。
- g. 「感嘆」用法は、話者の「感情」から「疑惑」に至る広い主観的態度を表す。語彙によって主観的態度が明示される感情・疑惑の複文とは、その点で異なる。
- h. これらの用法には接続法の諸時制を用いることが可能だが、実際には現在形の使用が圧倒的に優勢である。

第2節で2つの疑問を提起した。1つは「この構文の諸用法は単一の原理に収束するのだろうか」、もう1つは「この構文は、近似した内容を表す他の表現形式とどう違うのだろうか」というものであった。第1の問いには(21a~c)、第2の問いには(21d~g)という解答が、ともかくも与えられたことになる。

しかしこの考察によって、さらなる疑問がいくつも生じた。そのうち次の3点は特筆されよう。第1に、「願望」や「感情・疑惑」という意味は、文のどの部分で表現されるのかという問題がある。接続法自体がそれを表すのだろうか。そうでなければ、Kleiman (1974) はじめ多くの研究者が主張するように、文頭に潜在主節を仮定すべきだろうか。それとも Pons (2003) の説く「*que* 自体がモダリティを表す」という立場を是とするのがいいのだろうか。ここには、*que* をあくまで従属接続詞とみなす Lavandera (1972) と

que 自体を主部とみなす Hernández Alonso (1967) とに代表される見解の相違が関わっている。更には, Batista (1987/88)らの説く「queの諸機能は一元化して説明できる」とする見地の是非論へと発展していく。

第2に, 「que+接続法」単文の用法を「願望」系と「感情・疑惑」系の2つに分けたが, これらは相容れない2種の系列なのか, 統一して扱えるのか, という問題がある。これは名詞節をはじめとする従属節での用法とも関わる大きな疑問である。

第3に, 注8で触れた「que+直説法」単文は, 本稿の主題とどのような関係にあるかも, 看過してはならない問題である。

これら3点のうち, 第1の問題については, 筆者はかつて拙稿(1977: 39)で「潜在主節を設定する。その動詞は強いて具体的な動詞の形をとる必要はない」という立場を表明した。現在も基本的にはその想定が無理がないかと考えるが, 無形の要素を仮設することには十分慎重であるべきだから, 本稿ではこの問題に対する結論を留保し, (21)に示した内容を主張するにとどめたい。¹¹⁾

参考文献

- Alarcos Llorach, Emilio (1995) "De ciertos usos de la unidad /que/",
『スペイン文化シリーズ3 講演集(1994)』, 上智大学。
- Batista Rodríguez, José Juan (1987/88) "Sobre el /que/ y la subordinación
en castellano", *Revista de Filología* 6/7, Universidad de La
Laguna, La Laguna.
- 出口厚実 (1997) 『スペイン語学入門』, 大学書林。
- Díaz, Pilar *et al.* (2002) *El subjuntivo 1. Nivel intermedio*, Edinumen,
Madrid.
- Fernández Álvarez, Jesús (1984) *El subjuntivo*, Edi-6, Madrid.
- Galimberti, Beatriz *et al.* (1994) *The Oxford Spanish Dictionary*, Oxford

11) この問題を考える上で, 「que+接続法」単文などの構文について出口(1997: 106-107)が示す次の見解は示唆的である。「同種の構文は珍しくなく, なんらかの省略や統語的な瑕疵があるとみなすのではなく, (...) 一定の範囲で連結動詞が顕在化しない『不完全 copula 文』を透過させる仕組みがスペイン語文法に備わっていると考えられる。」

- University Press, Oxford.
- Garrido Medina, Joaquín (1999) “Los actos de habla. Las oraciones imperativas”, *Gramática descriptiva de la lengua española* (I. Bosque *et al.*, dirs.), Capítulo 60, Espasa, Madrid.
- Gutiérrez Cuadrado, Juan *et al.* (1996) *Diccionario Salamanca de la lengua española*, Santillana, Madrid.
- Hernández Alonso, César (1967) “El *que* español”, *Revista de Filología Española* 50, Consejo Superior de Investigaciones Científicas, Madrid.
- Hernández Mercedes, María Pilar (2006) *Para practicar el indicativo y el subjuntivo*, Edelsa, Madrid.
- Kleiman, Angela Bustos (1974) “A syntactic correlate of semantic and pragmatic relations: the subjunctive mood in Spanish”, University of Illinois 博士論文。
- Lavandera, Beatriz R. (1972) “La forma *que* del español y su contribución al mensaje”, *Revista de Filología Española* 54, Consejo Superior de Investigaciones Científicas, Madrid.
- Moliner, María (1966-67, 1998²) *Diccionario de uso del español*, Gredos, Madrid.
- Pons Bordería, Salvador (2003) “*Que* inicial átono como marca de modalidad”, *Estudios de Lingüística* 17, Universidad de Alicante, Alicante.
- Real Academia Española (2005) *Diccionario panhispánico de dudas*, Santillana, Madrid.
- Sastre, María Ángeles (1997) *El subjuntivo en español*, Colegio de España, Salamanca.
- 高橋覚二 (1996) 「ojalá あるいは *que* に先行された願望文」, 『原誠教授退官記念論文集』, 原誠教授退官記念論文集刊行委員会・編・刊。
- 寺崎英樹 (1998) 『スペイン語文法の構造』, 大学書林。
- 上田博人 (1984~1997) *Análisis lingüístico de obras teatrales españolas*, 12巻, 東京外国語大学 (第1~3巻), 東京大学 (第4~12巻)。
- 瓜谷良平・他 (1989) 『現代スペイン語の動詞・接続法使用の統計調査』, 自費出版。
- 和佐敦子 (2005) 『スペイン語と日本語のモダリティ』, くろしお出版。
- 拙稿 (1977) 「イスパニア語接続法の独立文中における用法について」, 『外国語教育』 4, 天理大学。
- <http://www.rae.es/>(Real Academia Española の CREA のサイト)
- <http://www.corpusdelespanol.org/>(Mark Davies 教授のコーパスのサイト)